

栗野・徒然日記

四帖の参・夏

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2024.6.7 路傍の花～その3～「似た者同士①」



この季節、ごく普通に見られるヒメジョオン。妙に赤っぽい花がありました。ハルジオンのようです。茎の中が空洞になっていて、葉の生え際が茎を包むような特徴が見られ、ヒメジョオンとの大きな違いです。そのほかにも、ハルジオンは蕾が下を向き、葉の裏に毛が無いことで見分けられると言いますが、すぐ近くで咲いている、茎が詰まって、葉もストレートに生えているヒメジョオンも、蕾が下向き、葉の裏に毛がないのはどういうことでしょうか。ハルジオンは、ピンク色がかったものが多いというけれど、多少ピンクがかったヒメジョオンと思われる個体もあります。確かに、ヒメジョオンの方が背が高くなるという違いはその通りです。

開花時期が、その名の通りハルジオンはこの時期に咲き、ヒメジョオンは秋まで咲くというので、もう少し観察してみましょう。

ちなみに、いずれも侵略的外来種に指定されています。

話は戻りますが、ヒメジョオンの花弁は太く、数も多いと言いますが、あまり違いがないように見えます。交雑しているのではと思うほど、よく似ています…ハテ?(朝ドラ「虎に翼」の主人公の口癖がうつってしまった)。



▶ 白い花はヒメジョオンの特徴だけれど、花弁の太さや数はハルジオンみたいです???

2024.6.8 路傍の花～その 4～「似た者同士②」



世に雑草と言われる草花の代表者とも言えるイネ科の植物。今の時期、様々な穂をつけ、道端に咲いています。名前を見分けるのが非常に難儀な植物でもあります。

中でも、ホソムギとネズミムギ、ネズミホソムギ、その近縁種(イヌムギ、カモジグサ、アオカモジグサなどなど)は、ちょっとやそつとでは見分けが付きません。

ホソムギとネズミムギの見分け方の基本は、まず針状に伸びる毛(芒・のぎ)があるかどうか、そして、花軸というか茎がザラついているかどうか。**茎がザラついて、芒があるのがネズミムギ**です。ところが、茎がザラついて、芒も目立たないのがあるので混乱してしまう。交雑種なのでしょうか。



▲左の品種は、茎がすべすべして、芒もないのでホソムギか？ 右は、茎がザラつき、芒があるのでネズミムギか？



▲左の写真の個体より、やや小ぶりで、左が20ほどの花に対し、30ほどの花をつけている。芒の有無も明確に区別できる。大きさを気にしなければ、こちらも、ホソムギ(芒なし、ザラつかず)とネズミムギ(芒あり、ザラつき)のように見える。



◀左の2種と右の2種で、これだけ大きさが違う。同じような生育環境なので、栄養の関係とも思えないが？



◀そしてこちらの2種は、大きさは上の写真の右2種と同じだが、いずれも花軸がザラつき、拡大すると…。



◀は芒がない(花軸はザラつくので、ホソムギではない?)。
右は、芒が短目が見られ、花軸もザラつくので、ネズミムギか? それとも混雑種か?



▲少し歩いただけで、こんなにいろいろな種類が。まだまだほかにも沢山のイネ科植物が、見られます。



▲上の2種類が混在して生えています。

2024.6.14 水辺の「似た者同士」



▲特定外来種のおオカワヂシャを原川で発見(5月18日)

昨年、鳥羽川の岸辺で見つけ、種を採取してこの春蒔いたカワヂシャが花を咲かせました。小さな目立たない白い花です。近年、全国的に生息数が減少を続けていることから、環境省のレッドブックで準絶滅危惧種の指定を受けています。発見した時、外来種のおオカワヂシャとの見分けがつかなかったのですが、市に問い合わせたカワヂシャと特定。石田川沿いでは普通に見ることができること(昨年取りまとめた「鳥羽川の植生報告書」参照)。

ところが、この春、原川の岸にオオカワヂシャが生えていました。深い護岸のため、遠目ですが、葉の形状からも間違いのないと思います。比べてみれば、間違いようのないほどに大きな花で、花卉の青さも際立っています。カワヂシャとの交雑によってホナガカワヂシャとなることから、在来種への影響が危惧され、外来生物法により特定外来生物に指定されています。

準絶滅危惧種と特定外来種・・・似た者同士でも、その取扱いは大きく違ってきます。

原川は、鳥羽川に注いでいますから、交雑種が繁殖する恐れが十分にあります。

2024.6.25 ムギワラトンボ



▲シオカラトンボの眼は、ブルー。青いお空を飛んだから～♪

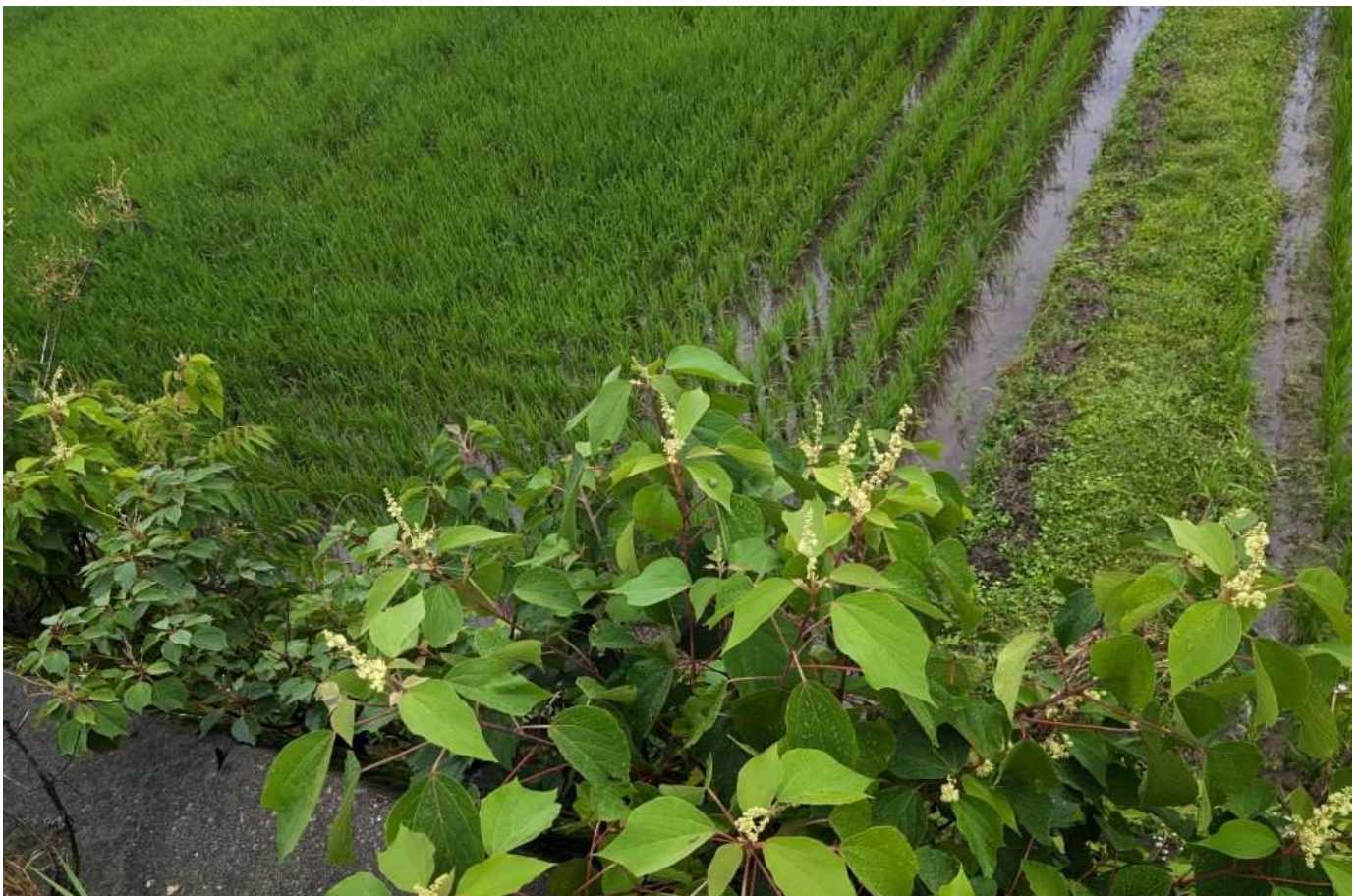
ムギワラトンボ・・・聞きなれない名前ですが、シオカラトンボのメスです。オスのシオカラトンボの名は、塩を吹いたような白い粉をまとうことに由来します。一方の雌は、麦わら色にちなむ名前ですね。

ごくふつうにみられるトンボですが、鳥だけでなく、昆虫も、オスの方が目立つ色をしているようです。メスを引き付けるためという説が、一般的でしょうか。



▲ツマグロヒョウモンのオス(左)とメス(右)。トンボと同じこの時期に飛翔しています。

2024.6.29 路傍の花～その5～アカメガシワ



今年、栗野の路傍の草花をまとめるため、日記も花の記録が多くなりがちに。

この時期、散歩していると、ところどころ上品な香水のような香がします。アカメガシワです。若芽が赤く、葉が柏のように大きなことが名の由来。青田の脇にも、枝を旺盛に伸ばしていました。



◀この時期にあちこちにひらひらと舞うオハグロトンボが羽を休めていました。香りに誘われて飛んでくる虫を狙っているのでしょうか、アカメガシワの葉の上で、アマガエルが花の穂を見つめていました。

2024.6.30 閉店間近・・・岐阜高島屋



7月末で閉店する柳ヶ瀬の岐阜高島屋。誕生当時の思い出は、以前日記に綴りましたが、この半世紀余り、百貨店やスーパーが中心市街地で隆盛を極め、そして消えていったことは幻のようです。柳ヶ瀬商店街には、丸物百貨店(のちの岐阜近鉄百貨店)、長崎屋、ユニー、タマコシ(のちのセンサ)、名鉄ショッピングセンターが、岐阜駅方面には、新岐阜百貨店、山勝(のちのパルコ)、ダイエー、イオンなど、40万都市には過剰ともいえる商業床で町は埋め尽くされていました。余談ですが、岐阜駅丸物百貨店(幼いころ、ゴールデンウィークに家族で京都に旅行に行ったとき、京都駅の近くにも丸物百貨店があったことに感動した記憶があります。ちなみにその時の宿は、商売人の宿だったので、二階建ての木造の建物で、低い天井の2階の薄暗い和室でした)。岐阜近鉄百貨店の閉店の時は、東の正門のシャッターが下りる中、店長がお辞儀をしていた光景を最前列で見っていました。

高島屋が去るのをとどめられなかったのは、残念ではあります。

用事で柳ヶ瀬に行ったので、最後の買い物をしました。地階と別館の無印良品の食料品ですけど…。衣料品など生活身の回り品を百貨店に頼らなくても手に入る時代は、百貨店の苦境を招くことは間違いない。車でいける栗野近辺のスーパー、ドラッグストア、衣料品店は数多い。高層階までニーズに合った品で埋め尽くせなかったこと、子供連れを楽しませる空間を用意できなかったこと、昔のように先進的に追い求め、実現できなかった、その道のプロにも、限界があるというのは何にもまして、寂しい。



▲高島屋別館の無印良品。昔の映画館の衆楽館の跡に建っている(この後、存続が決まりました)。



▲地階で崎陽軒のレトルトのシュウマイ、無印良品のレトルトカレー。後者は、コンビニでも手に入る。

2024.7.5 狂い咲き?



間違いなくススキ。いうまでもなく秋の七草が、7月3日、バイパス沿いの歩道で穂を出していました。いわゆる狂い咲きですが、スマレやツツジやキンモクセイなどによくみられる現象。ススキでは聞いたことがありません。これも異常気象のせいなのでしょう。



▲今朝はニイニゼミが登場。2.5cmほどの小型の蟬です。

2024.7.6 田の青さ



稲が一面に青々と葉を伸ばしてきました。雨の少ない梅雨、側溝から田水が引かれています。今年初めて存在に気づいた田螺(タニシ)も大きく育っています。その田螺をねらってか、ウマビルが何匹も身をくねらせています。黒いチスイビルよく見たことがありますが、緑色のこのヒルは、さらに気持ちの良いものではありません。田螺に田んぼの中に敵がいるのですね。



▲浮草も繁茂し始めました。やがて、水面を覆いつくします。ウマビルがタニシを狙っています。



▲側溝から田水を引いて…



▲住宅地の蓋付きの側溝から水が引き込まれます。乱開発、単独ばっ気浄化槽の半世紀前には、汚水も流れ込んでトラブルになったことも。今は、農地の宅地転用による乱開発の様相を呈しています

2024.7.16 ヒマワリに集う生命



七夕の朝咲いたヒマワリ。阪神・大震災の被災地に芽生えた“はるかひまわり”です。昨年種を取り寄せて地域に配布しました。種を収穫・選別した際のこぼれ種が冬を越し、早春に芽生えました。肥料を少し与えたところ、荒地にも関わらず、ぐんぐん伸びて3m超。そして、花開きました。

長い茎と大きな葉に、虫がしっかりくっついていきます。一つは、マダラキカメムシ(台湾から東南アジアを原産地とする外来生物)、もう一つは、チュウゴクアミガサハゴロモ(数年前からアミガサハゴロモに極めてよく似た外来種が各地で観察され話題になっていたそうです)。原産地が中国であることからチュウゴクアミガサハゴロモという和名が昨年名付けられたと言います。ネットで調べると、この二種の外来種の見撃情報が、同一人による同一の投稿で報告されています。どうやら、この時期、全国でも共通して見られるようです。

そのほかにも、アマガエル、カタツムリなど庭のヒマワリ1本にも多くの生き物が暮らしています。アマゾンの大木1本を調査すると、何千もの虫の新種が見つかるという話を、半世紀前に聞いたことがあります(さすがに今日ではそこまでではなく、1999年から2009年の間に、1,200種以上の植物と脊椎動物の新種がアマゾンでは発見されたそうです)。開発が進むアマゾン川流域(1年で長野県と同規模の面積の森が消えているそうです)。温暖化対策、生物多様性の保全…人間を救う薬剤開発にも役立つかもしれない種類もあるかもしれません。どれほどの貴重な資源が、失われていくか、気が木、いえ気ではありません。それにしても、草も虫も外来種だらけ。



▲チュウゴクアミガサハゴロモムシと幼虫(右)



▲マダラキカメムシ



▲カタツムリの1種



▲アマガエル

2024.7.14 浮草



7月7日にはまばらだった田んぼの浮草。1週間後には、水面を覆い尽くし、田の底が全く見えません。倍々にふえていき、3か月で400万倍になると言われます。め花とお花があり、め花の直径は、わずか0.2mmと、ウキクサの仲間は、世界で最も小さい花を咲かせます。撮影してみたいものです。

2024.7.23 ジップロックで梅干し



▲無事干し上がりました。砂糖の甘みを感じません。しっかりと酸っぱい。

梅雨明けのカンカン照りにつられて、梅干しを干しにかかりました。

この梅は、6月に(公益社団法人)岐阜市シルバー人材センターの保存食等研究部会主催の料理実習に参加した時、漬けて置いたもの。

これまでわが家では、梅に塩(20%程度)と粗塩だけのシンプルなレシピ。桶に入れ、そこそこの重しをして、水が上がるのを待ちました。カビが生えないよう気を使います。

今回、教わったレシピは、違う点がいくつも。

①粗塩の量は梅干しの重さの8%の減塩、②砂糖(塩と同量)と酢(梅1kgに対して50cc)を足すこと、それから大きく異なるのが、③桶ではなく、ジップロックを使うこと(梅1kgならLサイズでちょうど平らに並びます)、④重しは500g程度(本などの軽目のものがちょうど良い)などです。ジップロックに並び入れ、空気をしっかり抜き、念のためビニール袋を二重にかぶせ、重しをし、時折ひっくり返します。空気を抜くこと、あがってくる水ですっかりひたひたになることによって、カビの心配も減少します。

目からうろこの作り方。経験だけに頼らず、改良にチャレンジする姿は、新しい高齢者像。

切り干し大根やゆずジャムなど様々なレシピをまとめたメニュー集をまとめるとか。災害時への備えとしての保存食のほか、失われていく郷土食・行事食の研究も今後取り組みたいとのこと。社会貢献にもつながる研究部会の今後に期待したいですね。

実習で持ち帰りまじりまし数日た無事、水が上がり、冷暗所に置いておきました。我が家の梅干しと区別する意味もあって、紫蘇を入れず白干しにすることにしましたが、天日干しすると、写真のように、結構赤く色づいています。

さて、どんな味になっているか、あと数日後が楽しみです。

2024.7.28 赤トンボ



危険な暑さの今日、水田の上を赤トンボが群れて飛んでいます。鳥羽川でも見られました。トンボのメガネは青色メガネ、青いお空を飛んだから・・・ではないですが、灼熱の太陽光を浴びて、真っ赤に燃えているようです。

それにしても、ちょっと早くないですか？

栗野台の団地の中で、不思議なものを見つけました。クヌギマルタバチの虫えい(虫の刺激で出来たこぶ)です。中には幼虫が成長するための部屋があります。最初に虫えいのことを知ったのは、小学生の時。時々日記で紹介してきたマメダオシにできていたのを発見してからです。

これも真っ赤です。

今年はかなり暑い夏です。



▲クヌギマルタバチの虫えい。



▲こんなにも沢山。

2024.8.15 喜雨

7月31日から猛暑日(35度以上)が続いています。土は干からび、木も草も焦げ付いて枯れ始めています。昨夜、ようやくお湿りがありました。毎年記録的な猛暑と言うものの、打ち水イベントがまかりとおおり、地球温暖化への抜本的対策は、置き去りにしたまま。

それでも立秋の翌日、虫の音が一匹、お盆の昨日は、ツクツクボウシが初鳴き。

食傷気味のオリンピック報道(メダル数過去最高おめでとうございます)、花火大会※、地域の夏まつりも終わり、残るは甲子園…。夏は過ぎ行く…？





▲久しぶりの雨が、焦げたカンボクの葉を冷まし、ギボウシ(香りのよい品種・ロイヤルスタンダード)の花も、しっとり。

※花火の思い出 長良河畔の花火大会は、60年前までは早朝6時、正午にも煙花火が上がり、終わりは午後9時まで行われました。堤防沿いには各家庭が思い思いに栈敷を設け、下流からの見物客が腰を休めたものです。

金華橋と忠節橋の間で打ち上げた時は、実家のすぐ裏。二階の窓を開け放って眺めたもの。旅館街からの「遠すぎる」との苦情でこの年限りでした。この年、三尺玉は失敗した記憶ですが、ガラス戸がびりびりと振動したものです。

以前は、二つの新聞社が主催していたので、真剣みと責任が伴っていた気がします。そのせいかどうか、合同開催となった昨年は、点火装置の不具合で、開始が遅れる始末。そう言えば以前は、群衆に混じって二人組の男性が、「この花火大会はお粗末極まる、あちらの方がずっと良い」と声高に噂することもありました(もう一つの主催者が仕掛けたのではないとは思いますが)。

一方、閉口したのは、周辺の交通混雑。悲惨だったのは、夕立の時に、ある年などは予定より早く午後7時から急に連発し始め、あわてて車で会場近くに到着した7時20分ごろには、終了したとのアナウンス。音を聞くだけで見ることもないまま、渋滞に巻き込まれ、午後9時過ぎまで動きが取れず。この新聞社の花火大会は、名古屋方面からの客が多いので、地元優先ではなかったのでしょう。

花火に対する苦情もきっと多かったことでしょう。花火の翌日、生家の庭木に、花火で打ち上げられたパラシュートが引っかかっていました。40年ほど前にスターマインが登場したときは、度肝を抜かれたものです。8日間で2度の花火大会、早朝からの高揚感、一つ上がるとなかなか次が上がらなかつた原風景・・・心の奥にしまっています。

2024.8.27 落果



▲こんな状態になっていたとは、つゆ知らず。情報弱者になってしまったのか、マスコミの怠慢か、情報操作か。

山栗のイガが青いまま、道端に大量に落ちています。まとまった雨が降らず、声なき植物も悲鳴を上げているようです。この夏は、過去に記憶のないほどの暑さです。

お米がスーパーの棚から消えました。原因は、「今年の猛暑が米の収穫量減につながった」とか、今月8日の宮崎県で震度6弱の地震により、「南海トラフ地震の発生する可能性が高いとする臨時情報を出したことで米の買いだめが起きた」とか、「盆で流通が滞ったから」とか、「端境期だから」とか、「インバウンドで外食需要が増えたから」などなど…。

その一方で、昨年以上の暑さなのに、「今年の米の収穫は期待できる」と国は言います。「備蓄米を放出するほどひっ迫していない」とも言います(過去最低の備蓄量という現実が)。地方新聞が米不足を取り上げたのは、とっくに米が店頭からなくなった8月24日とはなんともはや。

一体全体、この危機感のなさは何?!

国家の安全保障は、防衛力のみならず(折から中国軍機が初めて領空侵犯したとの報)、食料とエネルギーの自給率確保のための予算配分のバランス。あっという間に兵糧攻めにより、餓死するような国の現状改善は、待ったなし。

乱立する自民党の総裁選候補者から、安全保障の政策は発せられるのか…耳をそば立てて、乞うご期待。

2024.8.31 実り



8月29日午前、ようやく2軒のスーパーにお米を探し当てました。1家族1袋の販売制限。まだまだ入手困難は続きそうです。いずれの店舗も、残り少な。新米も出回り始めました。

粟野の田んぼでも、もう実りが見られます。以前は同じ銘柄(晩秋に収穫するハツシモが多くみもの)が栽培されたものですが、水路の整備や共同での作業が減ったせい、収穫期の異なる米も見られ、早くも首を垂れる田もあります。そこには、地域のすべての雀が、集まっているかのようです。

のど元過ぎれば…ではなく、この機会に、食料自給率について、真剣に対策を講じていくことが、次の世代のためにも政策ではないでしょうか。



◀雀の大群はあっという間に飛び去って…意外に撮影は難しい。



◀青い穂が顔を出し始めたばかりの田が多い中、この田の稲には、もう実りが。

▲早くも岐阜県産の新米が出回り始めました。1家族1袋限り。まだまだ続く販売制限。



▶迷走する台風10号の影響でしょうか。夕暮れの風景に、秋を感じます。



これ以降の日記は、現在編集中です。